様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１７２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２６８４

研究課題名（和文）コピュラ文の意味構造と名詞句の定性に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Semantic Structures of Copular Sentences and Definiteness of Noun Phrases

研究代表者
熊本　千明（Kumamoto, Chiaki）

佐賀大学・全学教育機構・名誉教授

研究者番号：１０１５３３５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、名詞句が文中で果たす意味機能を名詞句の定性との関わりにおいて考察し、コピュラ文の分類と、その意味構造の分析を精密化した。指示的名詞句・非指示的名詞句の区別だけでなく、さらに詳細に、特定的名詞句、非特定的名詞句、個体指示名詞句、特徴記述名詞句、叙述名詞句、変項名詞句（西山 2003）の区別も考慮することにより、コピュラ文のみならず、存在文、分裂文、倒置構文、変化文、潜伏疑問文、潜伏感嘆文、NE（名詞句外置）、主語接触関係節、透明的自由関係節等、様々な構文に現れる名詞句の意味特性をより適切に説明できることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、指示性の観点から、英語の様々な構文に現れる名詞句の用法を明確にしたことである。日本語のコピュラ文に現れる名詞句の研究から得られた知見を元に、これまでに提案された概念が、英語の名詞句の意味機能の考察にどこまで有効であるかを検討した。日本語には「は」と「が」の区別があり、コピュラ文中の名詞句の意味機能が比較的分かりやすいが、英語にはこの区別がないため、冠詞の定、不定に基づいて意味機能を探る義論がしばしば行われる。こうした議論の不備を補うため、変項名詞句の概念を援用しながら、その適用範囲を広げ、これまで見落とされてきた、さまざまな名詞句の意味機能の重要な差異を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study has considered semantic functions that NPs perform within sentences in relation to definiteness of NPs, and refined the classification of copular sentences and the analysis of their semantic structures. It has shown that by noting not only the distinction between referential NPs and non-referential NPs, but also more detailed distinctions among specific NPs, non-specific NPs, NPs whose referents are individual entities, NPs whose referents are descriptions of characteristics, property NPs and NPIVs (NPs involving variables (Nishiyama 2003)), we can more adequately explain semantic properties of noun phrases that appear in various constructions, such as copular sentences, existential sentences, cleft sentences, inversions, sentences describing change, concealed questions, concealed exclamatives, NE (noun phrase extraposition), subject contact relatives, and transparent free relatives.

研究分野：言語学　意味論　語用論

キーワード：コピュラ文　分裂文　存在文　倒置構文　潜伏感嘆文　関係節　名詞句の指示性　名詞句の定性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「A は / が B だ」、「A is B」の形式をもつコピュラ文の分類を考える際には、その意味構造の理解のために、名詞句の意味機能を把握することが重要である。英語、日本語のコピュラ文の包括的な研究である Higgins (1979)、Declerck (1988)、西山 (2003) においては、措定文 (e.g. John is a student. / ジョンは学生だ)、指定文 (e.g. John is the winner. / ジョンが勝者だ)、倒置指定文 (e.g. The winner is John. / 勝者はジョンだ)、同定文 (e.g. That woman is the Mayor of Cambridge. / あの女性はケンブリッジ市長だ)、同一性文 (The Evening Star is the Morning Star. / 宵の明星が明けの明星だ)、倒置同一性文 (e.g. The Morning Star is the Evening Star. / 明けの明星は宵の明星だ) が区別されてきたが、その後、コピュラ文のタクソノミーを簡略化しようとする議論が見られるようになった (Mikkelsen 2005、Heller 2005、Patten 2012 等)。指定文に現れ、変項を表す非指示的名詞句は、西山 (2003) の提案する「変項名詞句」([…x…] という命題関数を表す名詞句) の概念によって特徴づけられ、それは、措定文に現れる非指示的名詞句である「叙述名詞句」とは異なるものである。また、同定文に現れる「特徴記述名詞句」は指示的ではあるが、同一性文における A、B のように個体を指示する通常の「指示的名詞句」とは異なるものである。しかしながら、こうした名詞句の特性は十分に理解されておらず、「同定文」(identificational sentences) の名の下に、指定文、同定文、同一性文 (等価文) が区別なく論じられたり (Halliday 1967、Fauconnier 1985、Heycock & Kroch 1999、Heycock 2012)、意味的、統語的に、倒置指定文 The winner is John. (勝者はジョンだ) と、措定文 John is the winner. (ジョンは勝者だ) (cf. 指定文 John is the winner. (ジョンが勝者だ) が関連づけられたり (Moro 1997、Mikkelsen 2005、Den Dikken 2006、Patten 2012)、同定文と指定文の類似性 (Mikkelsen 2005)、同定文と措定文の類似性 (Heller 2005) が強調されたりしてきた。また、名詞句の用法の説明には、指示的名詞句 / (叙述名詞句、変項名詞句などの) 非指示的名詞句の他に、事象様相 / 言表様相、広い作用域 / 狭い作用域、指示的用法 / 帰属的用法、特定的用法 / 非特定的用法、個体 / 個体概念など、様々な概念が提案されてきたが、それぞれどの側面を捉えたものか、相互にどのような関連があるのか、明らかではなかった。名詞句の定性は意味機能とどのような関係があるかという問題も、十分な議論がされないまま、残されていた。

２．研究の目的

本研究の目的として挙げたのは、(1) コピュラ文の意味構造を明確にすること、(2) 名詞句の意味機能を説明するために必要な概念を整理すること、(3) 名詞句の定性と意味機能の関わりを明らかにすること、(4) 変項名詞句の概念の適用範囲を拡大する可能性を探ること、である。(1) に関しては、同定文の意味構造を特徴記述の観点から再検討して、指定文、措定文との相違を明らかにし、また、倒置指定文と他の倒置構文の意味構造、情報構造の相違を、指定機能、提示機能の観点から明らかにする。(2) に関しては、コピュラ文、存在文、変化文、潜伏疑問文等に現れる名詞句の特徴づけにおいて、これまでに提案された諸概念がどれほど説明力をもつものであるか、検討する。(3) に関しては、叙述名詞句 / 変項名詞句の解釈と名詞句の定性との関わり、主語位置の名詞句と述語位置の名詞句の倒置可能性と定性との関わりを探る。(4) に関しては、変項名詞句の概念が定名詞句だけでなく不定名詞句にも適用できるかどうか検討し、また、変項名詞句の概念が、コピュラ文のみならず、変化文、存在文、潜伏疑問文、潜伏感嘆文などに現れる名詞句の意味機能の分析にどこまで有効か、検証する。

３．研究の方法

上述の目的を達成するために、理論的考察と、データの分析を行った。理論的考察においては、その意味構造と意味機能が明確に規定された「指定文」と「変項名詞句」の概念を、比較・検討の出発点とした。多くの文献にあたり、問題点を整理して、先行研究の妥当性を検証した。データとしては、ネイティブスピーカーの内省、各種コーパス (COCA 等)、文学作品等から得られた例文を用い、詳細な分析、記述を行った。英語、日本語のみならず、フランス語、ドイツ語、イタリア語などのデータも参考にした。また、国内外の研究者と頻繁に議論を行い、未解決の問題を検討した。国内外の学会で研究成果を公表し、参加者との討論をもとに研究を進展させた。

４．研究成果

本研究においては、指定文、措定文、同定文の意味構造と文中の名詞句の定性、存在文、分裂文、変化文、潜伏疑問文、潜伏感嘆文に現れる名詞句の特徴づけ、関係代名詞と先行詞の意味機能を中心に考察を行った。研究成果は以下の通りである。

(1) 同定文 A is B. (e.g. That woman is the Mayor of Cambridge.) には、指示対象について性質をコメントする機能はなく、B の名詞句は指示的名詞句であるが特徴記述を表し、個体指示的ではない。Heller (2005) は、同定文を措定文の下位区分と見なし、A、B の名詞句の指示対象の同一性と「識別性」の相違によって規定しようとするが、識別性の概念は不明瞭であり、B に本質的な叙述を表すとされる叙述名詞句が現れる、措定文との違いは明らかではない。また、倒置指定文の A、B の名詞句も同一指示であるとしているが、倒置指定文の A は非指示的名詞句であることを考えると、単に識別性の相違によって、指定文と同定文との区別が可能になるとする Heller の議論は受け入れられない。名詞句の指示的 / 非指示的の区別に加え、個体指示 / 特徴記述指示の違いを把握した議論が必要であることを示した。

(2) 倒置指定文を措定文の倒置と考える立場 (Mikkelsen 2005、Patten 2012) では、変項名詞句と叙述名詞句の区別がなされない。不定名詞句が主語の位置に現れた場合、倒置指定文 (e.g. An example of a superpower is the Soviet Union.) と措定文の倒置形とされるもの (e.g. Also a nice woman is our next guest.) では、意味構造が全く異なることを論じ、上述の考え方には問題があることを示した。また、不定名詞句を直接、変項名詞句と関連づけるのではなく、値の例示と捉える可能性も指摘し、さらに、指定機能とは異なる提示機能を持つ措定文の倒置形は、'aboutness' (ついて性) をもたないという点で、通常の措定文とは異なる特徴をもつことを示した。

(3) wh 分裂文が指定と措定の解釈をもつことは認められているが、it 分裂文にも、措定の解釈をもつものがあるとされる (Ball 1977、Declerck 1988、Hedberg 1990)。その例として挙げられる ①predicational it-cleft (Declerck 1988) (e.g. It was an INTERESTING meeting that you went to last night.) ②proverbial it-cleft (e.g. It is a long lane that has no turning.) ③less proverbial it-cleft (e.g. It is a good divine that follows his own instructions.) を詳細に検討し、①は、基本的に指定文であると考えられること、②、③についても、焦点名詞句の叙述的な要素に際立ちがあるものの、指定文と見なすことができるケースがあることを明らかにした。また、②、③が措定の解釈をもつ場合には、wh 節の内容と焦点名詞句の表す叙述との間には、前者が後者の判断の根拠を表すという、意味論的、語用論的なつながりがあることを示した。

(4) 法助動詞を伴うコピュラ文 (e.g. The first person to walk on the moon might not have been right-handed.) の「反事実仮想の読み」を検討し、変貌の読み「ニール・アームストロングは右利きでなかった可能性がある」と、入れ替わりの読み「左利きの人と交代していたかもしれない」の曖昧さは、主語名詞句が指示的名詞句であるか、変項名詞句が関与する名詞句であるか、という違いによるものであることを示した。名詞句の意味特性は、whoever 節を付加した場合に、it と s/he のいずれの代名詞が選択されるかという点に反映される。指示的用法 / 帰属的用法、事象様相 / 言表様相、広い作用域 / 狭い作用域などの概念を用いた従来の説明では、名詞句の指示性の相違をうまく捉えられないことを示した。

(5) 潜伏感嘆文 (Elliot 1971、Grimshaw 1979) のうち、特に名詞句外置 (NE) と呼ばれる構文 (e.g. It's amazing the height of that building. / It's amazing the odd people my sister knows.) を取り上げ、外置された名詞句の意味機能を考察した。潜伏感嘆文には、潜伏疑問文と同様、wh 節に対応する意味をもつ定名詞句が現れるが、その意味特徴は一様ではなく、潜伏疑問文の場合のように、全てのケースを変項名詞句と見なすことはできない。そこで、日本語の潜伏感嘆文を「潜伏命題文」の一部と分類した西山 (2003) にしたがい、変項名詞句だけでなく、「属性範囲限定辞」(西山 2003) (「A は B が C だ」(e.g. 太郎は性格がおとなしい) の B であり、色、味、性格、雰囲気等、C の上位概念を表す語) の概念の関与も考慮して、分析を行った。考察の結果、外置された名詞句は、変項や、属性の帰される範囲が明示されている場合とそうでない場合があること、いずれの場合も、背後に指定文あるいは措定文の意味構造を想定することができること、また、変項や属性の帰される範囲が明示されている場合には、対応する叙述文の形式 (e.g. The height of that building is amazing.) との間に意味上の差異が見られないことが明らかになった。構文文法の立場から、NE 構文における外置された名詞句が尺度的な解釈をもつことを、Metonimic NP 構文の特性と捉える Michaelis & Lambrecht (1996) の不備を指摘し、名詞句の意味機能という、より一般的な視点からの説明を与えた。さらに、NE 構文の用例を広く収集し、be 動詞の後には、感嘆に結びつくような、基準からの逸脱に対する感情表現ではなく、客観的な判断を表す表現 (e.g. understandable, significant) が現れる場合もあること、外置された定名詞句は必ずしも尺度的解釈を要求しないこと (e.g. It is well-known the use that we give to these type of tools.) を示した。

(6) 主格の関係代名詞が省略された主語接触関係節 (SCR) (e.g. There's a woman wants to see you.) の容認可能性については、提示機能 (Lambrecht 1988、den Dikken 2005) や、先行詞の指示性、特定性 (Doherty 1993、2000) による説明が行われてきたが、いずれも、部分的な説明にとどまっている。SCR 構文は、世界の中の対象、個体ではなく、出来事に注目した表現であることから、命題関数を表す変項名詞の概念を用いて、出来事的な捉え方を説明する可能性を示した。実際には、変項名詞句の概念が関与する指定文 (e. g. John's the only one can do it.)、絶

対存在文 (e.g. There's always some student can't remember his password.)、リスト存在文 (e.g. There is John can help you.) の他にも、普遍量化詞を伴う名詞句が現れた場合 (e.g. Everybody lives in this mountains has an accent.)、名詞句が不特定の解釈をもつ場合 (e.g. We wants someone knows John.) などの例もあり、個体指示ではない名詞句の、どの側面が SCR の容認可能性に直接関与するのか、さらに検討を深める必要がある。

(7) McCawley (1981、1998) は、先行詞との結びつきが弱い、ある種の関係節を「疑似関係節」と呼び、主節が表層において従属節に格下げされたものであると考える。McCawley によれば、疑似関係節は通常の関係節と異なり、変域の決定に関与しないため、多重構造をなす場合には、関係節の順序によって、真理条件が異なると主張する (e.g. There are many Americans who want to reinstate the death penalty who wrote in Spiro Agnew for President. / There are many Americans who wrote in Spiro Agnew for President who want to reinstate the death penalty.)。これらの例は第一関係節の特徴をもつものを基準にして、その中の割合を問題にするという解釈をもつという。しかし、実際には、これらの文は、変項を埋める値の存在を述べる絶対存在文 (e.g. There are two books required for the course.) としての解釈と、第二関係節が独立の命題として解釈される場合とで曖昧であること、また、後者の場合にも、割合を表すものと解釈する必要はないことを示した。

(8) 非制限的用法の関係節について、先行詞が人を表す場合の関係代名詞の選択には、先行詞の指示性が関与し、特定の指示対象をもつ場合には who が用いられるが、それ以外の場合には which が用いられることを示した。 例) ①先行詞が特定の指示対象をもつ場合: I met the piano teacher, who is Mr. Jones. ②先行詞が叙述名詞句である場合: The witness says the robber was a tall man, which this suspect is not. ③先行詞が変項名詞句である場合: Everyone wants to know/find out Tom's murderer, which I would rather consider to be Mary. ④先行詞が不特定の指示対象を指す場合: You certainly need a domestic wife, which is difficult to come by/find these days. また、先行詞が主節の中でもつ意味機能と、関係代名詞が関係節の中でもつ意味機能が異なる場合、容認度の判断には語用論的推論が関与し、容認可能な例においては、関係節内の意味機能を優先した選択が行われていることを明らかにした。例) ①先行詞が変項名詞句であり、関係代名詞が指示的名詞句である場合: The police finally found out Smith's murderer, *which/who they are going to arrest immediately. ②先行詞が指示的名詞句であり、関係代名詞が叙述的名詞句である場合: A career girl, which my fiancée doesn't happen to be, attracts me most.

(9) 通常の自由関係節(SFR) (e.g. He handed me what he had produced out of his pocket.) においては、wh 節全体が定名詞句であると解釈され、wh 句が主要部であるが、透明的自由関係節 (TFR) (e.g. Lakoff has made what appears to be <u>a radically new proposal</u>. / What could best be described as <u>pebbles</u> were / *was strewn across the lawn. / He was behaving what I could only describe as <u>strangely</u>./ What I could best describe as <u>my idol</u> kisses me.) においては、下線部の TN (transparent nucleus) が統語的、意味的な核であり、主要部として機能する。両者には、SFR の数は what が決定するが、TFR の数は TN が決定する、TFR における TN のカテゴリーは、名詞句、形容詞句、副詞句、前置詞句など様々である、TFR 全体のカテゴリーは、TN が決定する、TFR の主動詞は、appear、seem、consider、describe、assume、characterize、regard などの raising verb である、SFR は人を指示することはできないが、TFR にはできる、などの相違がある。こうした TFR の意味的、統語的特徴を説明するために、TFR を指定文と関係づける方法が提案されてきたが (Wilder 1999、Grosu 2003、Matsuyama 2018)、TFR の wh 句が変項、TN が値を表すと考えるよりも、TFR は同定文の意味構造を内在し、TN は特徴記述を表すものであると考えることによって、指示機能の観点からも無理のない説明が可能になることを示した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 熊本千明	４．巻 9
２．論文標題 主語接触関係節について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 佐賀大学全学教育機構紀要	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 熊本千明	４．巻 8
２．論文標題 「入れ替わりの読み」と「変貌の読み」について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 佐賀大学全学教育機構紀要	６．最初と最後の頁 21-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 熊本千明	４．巻 7
２．論文標題 Predicational It-Clefts と Proverbial It-Clefts	５．発行年 2019年
３．雑誌名 佐賀大学全学教育機構紀要	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 熊本千明	４．巻 6
２．論文標題 潜伏感嘆文の意味特性について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 佐賀大学全学教育機構紀要	６．最初と最後の頁 43-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　4件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 熊本千明
2．発表標題 先行詞の指示性と関係代名詞の選択
3．学会等名 第147回慶應意味論・語用論研究会
4．発表年 2022年

1．発表者名 熊本千明
2．発表標題 透明的自由関係節に見られるコピュラ文的特徴について
3．学会等名 2022年佐賀大学意味論研究会
4．発表年 2022年

1．発表者名 熊本千明
2．発表標題 存在文に現れる関係節について
3．学会等名 第134回慶應意味論・語用論研究会（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 熊本千明
2．発表標題 措定文の文体的倒置と倒置指定文
3．学会等名 第126回 慶應意味論・語用論研究会（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 熊本千明
２．発表標題 コピュラ文の分類について--同定文の位置づけ--
３．学会等名 第122回 慶應意味論・語用論研究会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 熊本千明
２．発表標題 NE (Nominal Extraposition) に現れる名詞句について
３．学会等名 2019年佐賀大学意味論研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Chiaki Kumamoto
２．発表標題 Semantic properties of concealed exclamatives
３．学会等名 8th Brno Conference on Linguistics Studies in English（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 熊本千明
２．発表標題 Predicational it-clefts と proverbial it-clefts
３．学会等名 第103回慶應意味論・語用論研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関